

機関番号：33908

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20530646

研究課題名 (和文) 心理臨床面接における言語的・非言語的情報の読み取りに関する基礎的研究

研究課題名 (英文) Therapist-client interaction in the simulated psychotherapy.

研究代表者

長屋 佐和子 (NAGAYA SAWAKO)

中京大学・臨床心理相談室・客員相談員

研究者番号：30410632

研究成果の概要 (和文)：心理面接場面で、セラピスト (Th) はクライアント (Cl) の言語的・非言語的情報を観察し面接を行う。このような情報抽出・分析の技能は、臨床実践経験によって異なると考えられる。本研究は、臨床歴が面接技能に及ぼす効果をみたものである。

研究の結果、言語的表現・非言語的表出の多様性と時系列パターンには、経験による差があることが明らかになった。加えて本研究では、当事者による評価、第三者による評価の分析も実施した。これらの所見から、面接技能が非言語的表出の抽出、雰囲気醸成、基本的手順、激励-まとめ-方向づけ、適切な応答、感情的開示の扱い、Clの欲求、その他から成ることが示唆された。

研究成果の概要 (英文)：Therapist at an interview session observes client's verbal and nonverbal expressions in the course of interaction. The skill of the information pickup and analysis is expected to differ with the therapists' career in clinical practice. This study examined the effect of clinical career upon the interview skill. Analysis of verbal and nonverbal interactions showed that the similar group differences in the variety and temporal pattern of expression. These findings inclusively demonstrated the effects of clinical experience upon interview skill. In addition, we analyzed the assessments given by participants themselves and the experts who experienced with psychological interview for longer than seven years. The above-mentioned findings suggest that main components of the interview skill would be picking-up of nonverbal expression, make-up of atmosphere, basic procedure, encouragement-organization-orientation, appropriate response, treatment of affective disclosure, client's needs, and so forth.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：臨床心理学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：心理面接, 言語的情報, 非言語的情報, ロールプレイ, ビデオ分析

## 1. 研究開始当初の背景

経験の浅い面接者が心理臨床面接の技法を習得する際、指導プログラムでは Th 側の態度・働きかけなどの学習が中心となる。ここで最も重視されるのは受容的な態度、質問・要約・解釈など Th 側の働きかけであり、その技能の習得が主となる一方、その場合、CI から発せられる言語的・非言語的情報の取得・分析に関する検討は看過されがちである。

他方、非言語的情報に関しては、静止画を用いた情緒認知に関する研究(長屋, 2003;2005, 長屋・深津, 2005;2007, 竹原・野村, 2004), あるいは面接場面を撮影した動画を用いた CI の視線・動作等の分析(吉田・堀, 1988)がある。これらの研究によると、静止画から得られる限定された情報に対して、情緒面だけでなく、行動面や生理状態に関する情報を読み取ることが明らかになっている。このように、非言語的情報が対人コミュニケーションにおいて活用されているにもかかわらず、心理臨床とのかかわりで検討した例はさほど多くない。

本研究では、心理面接場面における Th による言語的・非言語的情報の読み取り過程及びその内容について詳細に分析することによって、Th の面接技能の向上過程について明らかにできると考えられる。

## 2. 研究の目的

心理臨床の面接場面で、Th は CI から発せられる言語的な情報だけでなく、非言語的な情緒表出や行動を観察することによって必要な情報を取得・分析していると考えられる。このような情報取得・分析の方法は、経験の浅い Th と経験を積んだ Th では相違があることが推測される。

本研究では、心理面接場面における Th の言語的・非言語的情報の読み取り過程及びその内容について詳細に分析し、Th の経験による情報取得・分析機能の変化を明らかにする。それによって心理面接過程の本質を探ることができ、加えて大学あるいは大学院における心理臨床専門教育プログラムの作成に活用可能な所見を導くことができるものと期待される。

## 3. 研究の方法

### 【協力者】

Th	A群: 初心者(大学院生)	6名
	B群: 臨床経験年数 1~2年	5名
	C群: 臨床経験年数 4~6年	5名
	D群: 臨床経験年数 10年以上	2名
	(C・D群は臨床心理士)	
CI	大学学部 3・4年生	18名

### 【実験室の設定】

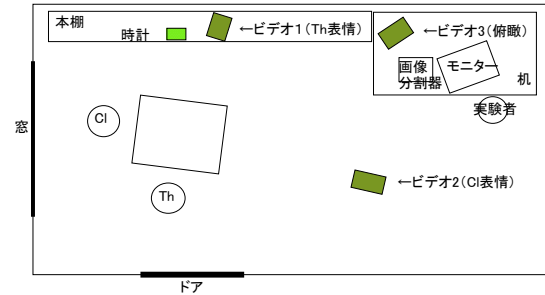


Figure1. 実験室の設定

室内に3台のビデオカメラ(Th と CI それぞれを正面から撮影するために各1台, ワイド撮影用に1台)を設置した。これに生理反応(呼吸波形)を撮った画面を加えた4画面をモニター上に分割配置し、映像を再生して言語・行動分析を行った。実験進行と機材操作を担当する実験者が同室した。室内の配置は Figure1に示すとおりである。

### 【面接セッション】

Th 役の協力者にはあらかじめ実験の概略を説明し、それに続けて「今回は日ごろ感じている人間関係のご相談ですね?」とセッションを開始し、終了まで約 30 分間、できるだけ自然な展開に委ねることにした。相談内容についても指示や操作を必要最小限にとどめた。

CI を演じることを承諾した協力者には、実施に先立ち「日常生活で経験する人間関係」を相談内容にする模擬セッションであることを説明し、自身や他者の実体験、創作したストーリーのいずれでもよいと伝え、セッションに臨むよう求めた。セッション終了後、担当者から問題のないことを確認するなど、倫理的配慮による確認を行った。

### 【収集する資料】

- (1) セッションの映像記録
- (2) 呼吸波形の記録
- (3) 面接当事者の回答

セッション終了後、面接内容の創作度(CI 対象)・主観的時間・親近感・通じ合い・緊張度について 5 段階評定および自由記述、緊張感の推移についての記入を求めた。緊張感推移は緊張度「普通」を起点とし、描き込まれた線までの垂線の長さを測定した。記入された線の始点を面接開始前、終点と終了後とし、面接中の緊張度推移は 1 cm 間隔で測定して「面接中 1~面接中 11」とした。

### (4) 第三者の評価

後日、臨床実践10年以上の経験者に、セッションの映像資料を送付し、雰囲気・心理的距離・方向性・進行・再来談・全体評価・経験年数の推定の項目について評定あるいは自由記述を求めた。

【資料の分析】

(1) 行動表出の分析

あらかじめ協議の上、ジェスチャー・表情・視線・姿勢・転移動作などのカテゴリを決定した。収録したテープを再生視聴し、30秒を単位とする時間区分ごとにその間に生じたカテゴリを0-1サンプリング方式でチェックした。その後、項目ごとにセッションの総点平均(2名の研究担当者の与えた数値の平均)および5分ごと得点平均を求め、後者をプロットして進行に伴う推移を示した。

(2) 言語表現の分析

あらかじめ協議の上、質問・確認・説明・助言・解釈・反射・応答・自己開示・保証励まし・直面化・沈黙などのカテゴリを決定した。収録したテープを再生視聴し、行動表出の分析と同じ方式で数値化した。

【研究倫理】

研究の実施にあたり、事前に協力依頼の文書を手渡し、プライバシーの保護、資料の保管・利用などを説明した上で、承諾が得られる場合は文書で本人の意思を確認した。

4. 研究成果

(1) 行動表出の特性

経験群別の行動発生回数の平均値について検討したところ、Th・Clともに視線逸脱の発生回数に有意差があり、A群のThは他群よりもClを注視する傾向があり、D群のClはThを注視し続ける傾向があった。

また、時系列的変化について検討したところ、ThのA群では高頻度で発生する行動(他者直視・うなづき)と低頻度の行動に二分され行動の多様性が低い傾向がある(Figure2)。

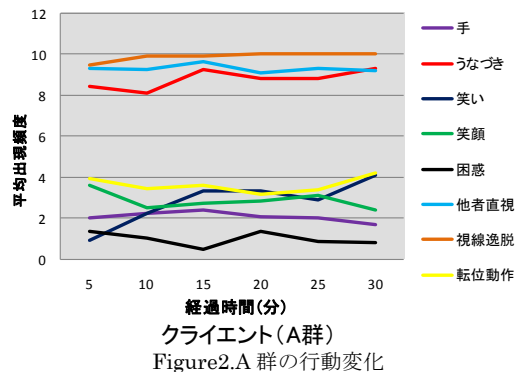
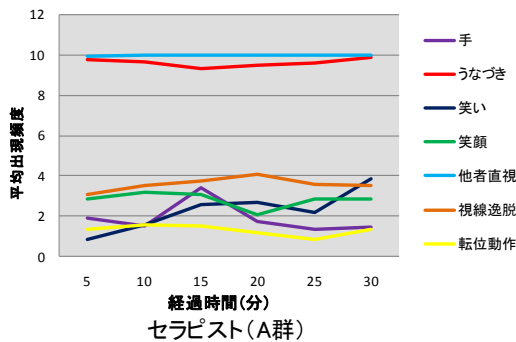


Figure2.A 群の行動変化

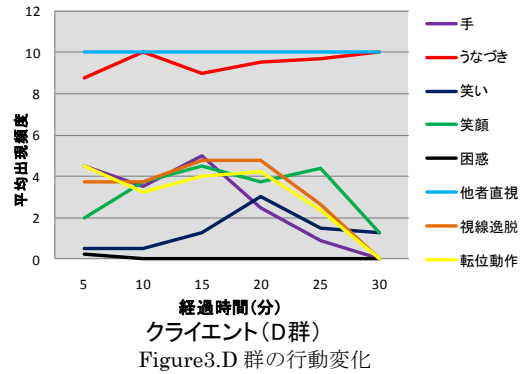
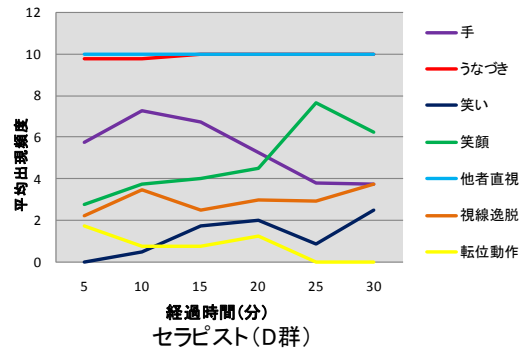


Figure3.D 群の行動変化

A<B<C<Dの順に多様性が高まり、D群(Figure3)のThになると、面接終了に向けて笑顔の増加の後、笑顔から笑いへと意図的な行動変化を行うことによって、Clに面接終了を示唆する働きかけを行う。

Clは、A・B・C群には際立った時系列的変化がみられなかったのに対し、D群では面接終了が近づくとつれて手・笑い・笑顔・視線逸脱・転位動作の著しい減少がみられた。

以上の行動の時系列的変化の所見より、臨床経験を積んだセラピストは面接の時間経過を考慮した対応方略を用いることが示唆された。また、他の経験群と比較してクライアントの転位動作の時系列的変化が顕著に生じることから、セラピストの面接方略がクライアントの内省を深める方向に機能している可能性が窺えた。

(2) 言語表現の特性

各経験群別の総生起数平均値について検討したところ、B-C間に有意差が認められ、B群はC群より助言を多く発しているのに対し、C群はまったく助言を発しないことが明らかとなった(Table1)。次に、時系列的変化について検討した結果を群別に示す。

①A群の特性: A群のThは、時系列的な変化は少なく、一貫して応答・質問が高頻度、確認が中頻度で出現した。質問は面接開始10分~20分でいったん減少し、20~25分に一時的に増加した。Clも時系列的な変化は少なく、説明が高頻度、応答-肯定が中頻度で出現した。

Table1. 各経験群別の言語表現評定項目の総生起数平均

	経験群		A		B		C		D		χ <sup>2</sup> 値
	人数	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD		
										6	
セラピスト	質問	30.17	4.99	24.80	8.74	32.50	8.82	24.00	2.83	3.26	
	確認	19.17	6.20	20.80	3.23	26.10	8.16	26.25	1.06	4.23	
	説明	1.33	1.17	1.80	2.97	2.60	2.99	0.25	0.35	2.24	
	助言	3.08	4.48	6.80	6.38	0.00	0.00	2.50	3.54	6.31	
	解釈	1.92	1.77	3.60	4.57	2.60	3.97	1.50	2.12	0.63	
	反射	5.58	7.00	3.00	4.81	5.80	2.51	7.00	5.66	2.52	
	応答	38.08	7.89	35.50	17.08	38.20	13.23	43.50	3.54	0.64	
	自己開示	0.00	0.00	0.20	0.45	0.00	0.00	0.00	0.00	2.60	
	保証・励まし	1.33	2.16	0.80	0.84	0.10	0.22	0.00	0.00	2.85	
	直面化	1.33	2.16	2.50	3.43	2.30	2.25	4.25	4.60	2.51	
クライアント	沈黙(5秒)	2.33	2.25	1.40	0.89	1.90	1.95	0.75	1.06	1.72	
	説明	48.25	8.89	44.00	14.51	46.40	8.37	46.75	8.84	0.10	
	応答一肯定	22.75	4.08	18.30	12.36	19.80	8.61	22.25	8.13	0.14	
	応答一遅延	7.67	8.02	5.80	7.29	4.80	4.63	1.50	2.12	2.98	
	応答一否定	3.00	2.83	4.00	3.79	2.80	3.07	0.50	0.71	1.81	
	内省	1.83	1.63	0.10	0.22	0.40	0.89	1.00	1.41	4.72	
	質問	0.00	0.00	0.30	0.67	0.60	0.65	0.25	0.35	4.71	
	要求	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
	沈黙(5秒)	8.00	8.94	2.80	5.72	3.60	3.51	1.25	1.77	4.74	

\*p<0.1

②B群の特性: B群のThは、面接開始時に応答・質問が高頻度、確認が中頻度で出現したが、これらは時間の経過とともに減少し、終了前5分間で大きく減少した。また同時に、助言・解釈が急増した。Clは、開始時に説明が高頻度、応答一肯定が中頻度に生じたが、説明は徐々に減少し、後半には急激に低下した。これらのことから、終盤ではThの語りが増加したことが推測された。

③C群の特性: C群のThは、開始時に応答・質問が高頻度、確認が中頻度で出現した。応答・質問は中盤からわずかに減少した。また、後半には沈黙が増加した。Clは、開始時には説明が高頻度、応答一肯定が中頻度に生じ、後半には説明が徐々に減少した。これらのことから、C群のThが沈黙に対して動揺せず、Th・Cl双方の言葉が少なくなる様子がうかがわれた。

④D群の特性: D群のThは、開始時に応答・質問が高頻度、確認が中頻度で生じたが、10分を過ぎると質問は減少した。応答は20分頃にいったん減少し、その後確認とともに増加し、さらに終了前5分間では反射・助言が増加した。他方、Clには時系列的変化は少なく、一貫して説明が高頻度、応答一肯定が中頻度で生じた。

上述の結果より、初心者のThは、受容的対応に注意を集中するものの、会話が並行して進むために情緒的に深まりにくいようであった。1~2年の経験を積むと、会話を進めようとしてThのほう積極的に発言し、受容・共感がおろそかになる傾向がみられた。5~6年経験を積んだThでは、焦って解決を急ぐことはなくなり、沈黙を共有できるようになると思われた。経験10年以上になると、会話を進めることと受容・共感とが両立できており、面接の時間経過を考慮しながら、見通しを持った対応をしていると考えられた。

(3) 当事者による評定

① 面接内容の創作度: 創作度は3.83~4.5であり、相談内容が現実に近い内容であったこ

とが示された。

② 主観的時間: Th・Clが面接を長く感じたか、あるいは短いと感じたかについて検討を行った結果、有意な差は認められなかった。しかし、経験群別の平均値を比較すると、A・D群のClは実際の時間とほぼ同じと評価したが、B・C群のClは実際の時間の約60%であると評価した。

③ 親近感: Th・Clの親近感の違いは、群間に有意差は認められなかった。

④ 通じ合い: 通じ合いについて検討を行った結果、B群ThはClから気持ちが通じたとの評価を得ているにもかかわらず、自己評価が有意に低いことが明らかとなった。経験年数が増すにつれてThとClの評価差がなくなることから、臨床経験の不足が自己評価の低下を引き起こしたと推測される。

⑤ 緊張度: Th・Clの緊張度に関する検定では有意差が認められなかった。

⑥ 緊張感の推移: 緊張感の推移の結果をTable2・3に示す。

Table2. Thの主観的緊張度(平均)の推移

	面接中											面接後	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11		
A	2.58	2.85	2.38	1.72	1.12	0.83	0.90	0.53	0.45	0.30	0.05	0.05	-1.07
B	2.78	1.90	0.34	0.20	0.22	0.64	0.58	0.12	0.14	0.42	0.20	-0.18	-1.70
C	1.92	1.52	0.98	0.72	0.46	0.40	0.56	0.80	1.18	1.66	2.06	2.16	-2.24
D	2.10	-1.00	-1.05	-1.45	-0.35	-1.45	-0.90	-1.45	-1.05	-0.40	-0.65	-1.50	-2.45

Table3. Clの主観的緊張度(平均)の推移

	面接中											面接後	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11		
A	2.92	2.22	1.57	0.98	0.87	0.57	0.18	0.05	-0.18	-0.33	-0.58	-0.90	-1.78
B	0.98	1.60	2.08	2.06	1.28	0.64	0.68	1.04	0.98	0.40	-0.26	-0.74	-1.88
C	1.50	2.30	1.72	0.94	-0.28	-0.62	-1.12	-1.42	-1.50	-2.12	-2.64	-2.80	-3.44
D	3.85	3.75	3.60	3.35	3.15	3.00	2.70	2.20	1.30	0.35	-0.25	-0.80	-1.35

Thの緊張感推移の経験群による差について検定を行ったところ、面接中1・10・11で有意差及び有意傾向が認められた。このため、下位検定を行った結果、面接開始直後にD群Thの緊張度が急激に低下し、面接終盤になるとC群の緊張度が上昇する傾向が認められた。

これに対してClは、経過時間にかかわらず有意差が認められなかった。また、推移を詳細に検討したところ、D群Thは終始緊張せずに面接を進めるが、Clの緊張感が高いまま推移し、面接終盤に低下する様子が見られた。これらのことから、D群Thは緊張することなく面接に臨み、序盤・中盤ではClが面接に集中するよう働きかけていると推測される。また、終盤に至るとClの緊張感を低減し、面接に集中した状態から解放することによって、スムーズな終了を図ったと思われる。

本研究の結果より、臨床経験が2年未満のThは自己評価が低い傾向があり、10年以上の経験を積むことによって、緊張することなく面接に臨むことが可能となることが示された。また、Clの

緊張を緩和することは心理面接の進行上必ずしも有効ではなく、CI がある程度の緊張感を維持し、内省を深めるような働きかけが重要だと考えられる。

#### (4) 第三者による評定

各経験群の第三者評定の各項目別平均値について検討を行った(Table4)。その結果、雰囲気、方向性、進行、再来談、評価、臨床経験年数において有意差が見られた。さらに下位検定を行ったところ、雰囲気・方向性の2項目についてはD群がB群より高く、また、進行・再来談・評価・臨床経験年数の4項目についてはC群、D群がB群より高い結果となった。また、再来談・評価についてはA群がB群より高く、臨床経験年数についてはC群、D群がA群より高い結果となった。これらの結果から、B群は心理的距離以外のすべての項目において他群を下回ることが明らかとなった。

Table4. 第三者評定各項目別の平均値および分散分析(1)

経験群	度数	雰囲気			心理的距離			方向性			進行		
		平均	SD	F値	平均	SD	F値	平均	SD	F値	平均	SD	F値
A	18	5.44	1.25		5.11	1.28		5.06	1.30		5.00	1.33	
B	15	4.87	0.83	3.63 *	4.93	0.96	2.35	4.07	1.87	4.31 *	3.80	1.74	6.08 **
C	15	5.47	1.06		5.07	1.22		5.20	1.66		5.40	1.64	
D	6	6.50	0.55		6.33	0.82		6.67	0.52		6.67	0.52	

\* p<.05

\*\* p<.01

Table4. 第三者評定各項目別の平均値および分散分析(2)

経験群	度数	再来談			評価			臨床経験年数 <sup>1)</sup>		
		平均	SD	F値	平均	SD	F値	平均	SD	F値
A	18	5.00	1.68		4.94	1.43		2.56	0.98	
B	15	3.33	1.63	5.75 **	3.60	1.35	8.73 **	1.67	0.72	14.39 **
C	15	5.07	1.62		5.53	1.55		3.67	1.45	
D	6	6.17	1.17		6.67	0.52		4.50	0.84	

1) 1. 未経験, 2. 1~2年, 3. 3~5年, 4. 6~9年, 5. 10年以上 \* p<.05

\*\* p<.01

また、自由記述の分析から、A群は技術的には未熟であっても、初心者特有の熱意があり、それがCIに評価されていること、B群は解釈や問題解決に関心が向いており、傾聴などの基本的態度や技法が疎かになりがちであること、C群、D群は基本的技術や態度を習得しており、特にD群はCIの状態や問題に合わせて、臨機応変に対応していることが示された。

さらに、評定を依頼したベテランのセラピストの視点を分析、検討した結果、心理面接教育において習得すべき面接技能の視点が明らかとなった。

#### ①非言語的側面

セラピスト自身の無意識的な行動とその行動がクライアントに与える影響、非言語的な同調性の有無など

#### ②セラピストの雰囲気

ラポールの形成を促す受容的雰囲気の有無

#### ③基本的面接技法

心理面接の基本的技法の使い方、およびそれ

が面接過程に与える影響

#### ④応答的確さ

介入のタイミング、応答内容の適切さ、文脈や面接の流れの考慮など

#### ⑤感情の取り扱いおよび共感性

クライアントの感情への気づき、汲み取り、共感、また情報収集と感情への関与のバランス

#### ⑥面接の促進

「語りを促す」ような働きかけの有無

#### ⑦面接のまとめ、方向づけ

#### ⑧クライアントのニーズ

以上の考察から、セラピストの養成・教育において、大学院修了後も心理面接の基本的技法や態度を継続的に教授していくことの重要性が導き出された。

#### (5) 総合考察

本研究にあたっては、心理面接の初回セッションを模した事態を設定して、面接者(Th)と被面接者(CI)の二者関係における言語的・非言語的相互作用を分析する一方、セッション参加当事者および第三者によるセッションの評定・評価を求めて、その所見との対応を求め、Thの経験年数による差を中心に検討した。

すでに述べたように、ThとCIの発語および行動にみられる経験効果は、セッション進行に伴う時系列変化に顕著にみられる。豊富な経験をもつThの場合には、自己開示を促すようにCIにはたらきかけ、二者関係がダイナミックに展開するよう導くことができる。それに対して、実践経験のないThの場合、CIの開示に任せるのみで、両者の役割が未分化な状態にあり、日常的な二者間のコミュニケーションと類似の展開にとどまっている。その両極の間にあつて、実務経験が3年未満のThの場合、CIとの間に適切な“距離”をとることに困難を感じ、相手の洞察を導くことに性急なあまり過度の介入によって逆の効果を与えがちである。4~6年の経験を積むことによって、その難点は克服されるが、相互作用の深化に必要な構造化には及ばない。

このような面接技能の上達過程は、セッション参加当事者あるいは第三者の評価にも的確に反映され、その際の基準も明らかである。

該当の考察において示したように、本研究には修正を要する問題や残された課題もすくなくない。本研究の成果はそれらの課題を基礎づけるものとなりうる。

ここまで、本研究の成果を現実の面接場面や事例に即して論じることをあえて避けてきた。それは、そのようなアプローチが事例への安易な還元となることを危惧したからである。本研究の成果が事例の記録や分析に活かされ、経験知と相まって心理臨床の技能水準が高められることを期待したい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 永田法子・野副紫をん・立川知美・長屋佐和子 2009年 学部教育におけるカウンセリング実習. 中京大学心理学部紀要, 査読なし, 8(2), 1-7.
- ② 長屋佐和子・永田法子・深津千賀子 2009年 心理臨床面接における言語的・非言語的情報の読み取りに関する基礎的研究—研究構想の概要—. 中京大学心理学部紀要, 査読なし, 8(2), 17-24.

[学会発表] (計6件)

- ① 野副紫をん・長屋佐和子・永田法子・深津千賀子・立川知美・辻敬一郎 2011年9月15～17日 模擬面接場面における二者相互作用の多元的分析(6)—第三者による評定の分析—. 日本心理学会第76回大会, 日本大学.
- ② 長屋佐和子・永田法子・深津千賀子・立川知美・野副紫をん・辻敬一郎 2011年9月15～17日 模擬面接場面における二者相互作用の多元的分析(5)—面接当事者による評定の分析—. 日本心理学会第75回大会, 日本大学.
- ③ 永田法子・長屋佐和子・深津千賀子・立川知美・野副紫をん・辻敬一郎 2010年9月21日 模擬面接場面における二者相互作用の多元的分析(4)—言語表現の特性—. 日本心理学会第74回大会, 大阪大学.
- ④ 長屋佐和子・永田法子・深津千賀子・野副紫をん・立川知美・辻敬一郎 2010年9月21日 模擬面接場面における二者相互作用の多元的分析(3)—行動表出の特性—. 日本心理学会第74回大会, 大阪大学.
- ⑤ 永田法子・長屋佐和子・野副紫をん・立川知美・辻敬一郎 2009年8月26日 模擬面接場面における二者相互作用の多元的分析(2)—非言語的表出の検討—. 日本心理学会第73回大会, 立命館大学.
- ⑥ 長屋佐和子・深津千賀子・永田法子 2009年8月26日 模擬面接場面における二者相互作用の多元的分析(1)—研究構想の概要—. 日本心理学会第73回大会, 立命館大学.

[図書] (計1件)

- ① 長屋佐和子・永田法子・深津千賀子・辻敬一郎・野副紫をん・立川知美 2011年 研究成果報告書「心理臨床面接における言語的・非言語的情報の読み取りに関する基礎的研究」. 一誠社. 136ページ.

## 6. 研究組織

- (1) 研究代表者  
長屋 佐和子(NAGAYA SAWAKO)  
中京大学・臨床心理相談室・客員相談員  
研究者番号 : 30410632
- (2) 研究分担者  
永田 法子(NAGATA NORIKO)  
中京大学・心理学部・教授  
研究者番号 : 60329654  
深津 千賀子(FUKATSU CHIKAKO)  
大妻女子大学・人間関係学部・教授  
研究者番号 : 20051625
- (3) 研究協力者  
辻 敬一郎(TSUJI KEIICHIROU)  
名古屋大学・名誉教授  
野副 紫をん(NOZOE SHION)  
名古屋経済大学・名古屋経済大学短期大学部・学生相談室・専任カウンセラー  
立川 知美(TACHIKAWA TOMOMI)  
中京大学・臨床心理相談室・客員相談員